

未来へつなぐ vol.18 | 吉村 光司 |

さいたま商工会議所 会員交流・サービス事業委員会 委員長
(株)八洲電業社 代表取締役社長一人ひとりがNo.1のプロを目指して
インフラを支える隠れた実力者集団

県内各市の庁舎や、さいたまスーパーアリーナ、さいたまスタジアム2002など、地域に親しまれる多くの公共施設の電気工事・システム保守を担う(株)八洲電業社。戦後復興期の創業以来、77年にわたり地域の発展を陰で支える同社の理念を、三代目社長である吉村光司氏に伺いました。

吉村 光司 (よしむら こうじ)

1976年、さいたま市北区生まれ。東北大学大学院卒業後、(株)東芝に入社。火力・原子力発電所用タービンの設計などに従事。2008年、(株)八洲電業社に入社。2011年から父である克昌氏と共に二代制となり、2017年に代表取締役社長就任。2022年からさいたま商工会議所会員交流・サービス事業委員長。

終戦の翌年、日本の復興を支える決意で創業

1946年に当社を創業した私の祖父は、大分県出身でした。吉村東一郎という名ですが実は三男で「上がいるから家督は継げない。東に行って一番になれ」という意味の命名だったようです。

成長した祖父は言われたとおりに上京して勉強に励んでいたのですが、戦火が激しくなったことから埼玉に移ります。現在、陸上自衛隊大宮駐屯地となっている区画が陸軍造兵廠になっていて、祖父はそこで電気主任を務めながら終戦を迎えました。

工場が解散し、仕事なくなった祖父は、個人で独立することを決めます。社名につけた「八洲」とは、イザナギ・イザナミの国作りの物語に出てくる「大八洲」という日本全土を表す言葉だそうです。復興していく日本を支えるのだという、若き日の祖父の意気込みが伝わってくるようですね。

埼玉・東京にエリアを広げ
インフラ整備に欠かせない存在に

軍需工場時代に同僚だった電気技師たちも集まって、埼玉県内だけでなく東京エリアまで取引先を広げた当社でしたが、祖父は1974年に急逝してしまいます。急に承継することになった父・克昌も大変だったでしょうが、腕のいい社員とお取引先に支えられて、この難局を乗り切ることができました。

祖父が亡くなったのは私が生まれる前なので、きっかけは分かりませんが、当社は早いうちから公共施設の案件を多数請負ってきました。大きな案件は実績になりますが、その分責任も重大。特に近年はインターネットの普及などもあり、電気



安心な暮らしを守る警察署など、多くの公共施設の電気設備工事を受注している。

を使う設備が増え、工事はどんどん複雑化・高度化しています。この時代の流れに対応して、設計・施工・保守までを一貫で受けられるのも、優秀な社員がいるからこそと、常々感謝しています。

どんな先進技術も、動かすのは電気
誇りを胸に、研鑽を続ける

インフラはいつでも「何事もない」ことが重要で、トラブルが起きて叱られることはあっても、褒められることはめったにありません。若い人はこういう地味な仕事を敬遠するため、当社にとっての大きな課題は、やはり人材確保と育成でしょう。

優れた技術者なくして成り立たない仕事ですから、会社と社員はいわば運命共同体。縁あって入社してくれた社員の努力に報いるため、資格取得の支援や待遇にはかなり力を入れているつもりです。



埼玉スタジアム2002、熱狂の舞台裏にも同社の技術あり。

人材育成の取り組みとしては、ベテラン技術者を講師に、定期的に社内研修会を行っています。これは全社研修で、技術部門の社員はもちろん、事務担当者も参加します。なぜ事務方まで、と思うかもしれませんが、ここで議論されるのは、技術的なことだけではありません。

例えば先日あった、大手ゼネコンの施工トラブルなどを題材として、なぜそういう事態になったのか、どうすれば防げたのかを、さまざまな立場から議論するのです。知識と技術はもちろんとして、プラスαの対応力・想像力を養う場になればいいなと期待しています。

2017年に三代目として跡を継ぎ、今年で創業77年。社内体制の整備もひと段落し、次の目標である100年企業を目指すうえで、私は社員に「一人ひとりがナンバーワンの仕事をしよう」と伝えていきます。

同業他社は多いし、自分と同じ仕事をしている人もたくさんいる。それでも「これは自分がいちばん！」と誰もがいえるプロ集団になることが、次のステージに至る道だと思っているからです。

これから先進技術がどれほど進化しようと、その原動力は電気。だから、電気工事という分野で確かな実績を持った当社が不要になることはない。そういうポテンシャルを持った企業なのだという誇りを持って、信頼経営に邁進したいと思っています。